

## 平成 24 年度 入学式 式辞

花咲く春を迎え、ここに多数の御来賓、並びに保護者の皆様のご臨席を賜り、入学式を挙行できますことは、本学のこの上ない慶びであり、姫路獨協大学を代表して、謹んで御礼申し上げます。

新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。新たな飛躍のときを迎えられた皆さんに、心から歓迎の意と、お祝いを申し上げます。

皆さんは、これから 4 年もしくは 6 年の間、本学で学ばれるわけですが、まず、姫路獨協大学が、どういう大学かということを上げたいと思います。それは、「あなたが学んでいる大学はどのような大学ですか」、と尋ねられたとき、あるいはまた、後に皆さん自身がキャリアを語る時、その時に、胸を張って答えられるよう、しっかりと心に止めていただきたいことでもあります。

姫路獨協大学は、獨協学園という学校法人に属しております。その獨協学園は、本部が関東の埼玉県草加市にあります。獨協学園は、現在、獨協大学、獨協医科大学、姫路獨協大学の 3 つの大学と、獨協中学・高等学校、埼玉獨協中学・高等学校の 2 つの中学・高等学校を擁しています。

獨協学園の源は、129 年前に遡り、1883 年に開校した獨逸学協会学校にあります。この獨逸学協会学校は、後に旧制の獨協中学校となりました。獨協学園の「獨」、姫路獨協大学の「獨」は、このドイツという国名に由来しています。そして、今から 48 年前の 1964 年に、獨協中学出身の、天野貞祐元文部大臣を学長とする、獨協大学が設立されました。その後、1973 年には、獨協医科大学が設立され、本学、姫路獨協大学は、今から 25 年前の 1987 年に、ここ姫路に開学いたしました。

このように、獨逸学協会学校の設立の経緯からして、獨協学園は、国際的な視野を持つ人材育成を原点にもつ学園であります。本学に外国語学部があり、海外での学びの多様な国際交流プログラムが展開され、また多くの留学生が在籍しているのも、その伝統由縁であります。現代は、たとえ地方にいようと、国際化の波を避けることはできません。新入生の皆さんが、国際感覚を身に付け、雄飛するための土壌としくみとは、十分に備わっていると申し上げたいと思います。

また本学は、地元姫路市から、用地と多大な寄付とを提供され、獨協学園が経営にあたるという、全国で初めての、公私協力方式という形で発足いたしました。当初は、外国語学部と法学部の 2 学部からの出発でしたが、その 2 年後に経済情報学部が設置され、文系 3 学部となりました。そして、今から 6 年前には医療保健学部、5 年前には薬学部が加わり、兵庫県西部における、文理 5 学部からなる唯一の総合大学に成長いたしました。このような設立の経緯から、本学にとって、地域貢献は欠かすことのできない、重要な責務であり

ます。幸い、昨年秋の大学の地域貢献度調査では、本学は全国469大学中第50位にランクされ、兵庫県下では、39の4年制大学があるなか、神戸大学、関西学院大学に次いで第3位にランクされました。文理5学部となって丸6年となる来年3月には、この5学部すべてから、卒業生を送り出すようになります。本学は、今後も、人材育成はもとより、様々な形での、より一層幅広い地域貢献ができるよう、努力してまいりたいと考えております。

もう一つ忘れてはならない、大切なことがあります。それは、獨協学園に流れる、精神についてであります。先に述べました、獨協大学の設立に努力した、哲学者でもある初代学長の天野貞祐は、「大学は学問を通じての人間形成の場である」と述べております。その真意は、人間形成はどこでも可能であるけれども、大学における人間形成は、勉学によるものが本道であり、学問を媒介としたものである、という点にあります。学問の目的は真理の探究にあり、その真理探究心に基づき、しっかりとした精神的背景を持ち、豊かな教養と専門の知識を身に着けた、人材が育つところであるというのであります。難しい問題に向かい、努力してそれを解いてゆく姿勢、そして得られた答を基に実践する姿勢、この積み重ねが、ごまかしのない心を養い、人格を高めるといいます。姫路獨協大学は、この精神を継承し、有為な人材を育成することを、至上の命題としております。

ところで、皆さんは、高等学校の古文で、吉田兼好の「徒然草」を習ったかと思えます。「徒然草」は、すべてで243段ありますが、その第157段の書き出しに、「筆を取れば物書かれ、楽器を取れば音を立てんと思ふ。盃を取れば酒を思ひ、賽を取ればだ（手へんに難）打たん事を思ふ。心は、必ず、事に触れて来る。（後略）」とあります。

これを現代語に訳すれば、「筆を手にする、自然と何か書くようになり、楽器を手を取れば、音楽を奏でようと思う。杯を手にする、酒を飲みたいと思ひ、サイコロを手にする、それで賭けをしてみようと思う。このように、心というものは、必ずながしかの物事に触れて、生じてくるのである」となります。兼好は、これに続けて、「だから、かりそめであっても、不善をしてはならない。」と言っています。もちろん、不善をしないことは大事なことでありますが、私は、ここで、『不善をしないでください』というお願いをしたいのではありません。その前の文の、「心というものは、物事に触れて生じるものである」という認識を重視したいのであります。

そこで、皆さんには、本学への入学を機に、自身が考える将来像を見据えて、あるいは人間形成のために、なにか一つ新しい習慣を身に付けることをお勧めいたします。私自身、大学生になったとき、ある小さな決心をしました。それは皆さんに披露するようなものではありませんが、その習慣は今日まで続いています。周りから見れば、ほんの些細な事であったとしても、それを続けることには、大きな意味があります。それは、決心した自分を裏切らないことであり、自分を律する自分になることであり、自分が自分の主体になる

ことであります。

私たち、姫路獨協大学は、「大学は学問を通じての人間形成の場である」という理念を灯として、高齢化社会と人口減少、それに国際化が進むという、激動する社会のこれからをリードする、優れた主体性をもつ人材を育てるべく、皆さんの成長に全力を尽くし、期待にこたえます。ここ姫路獨協大学での勉学生活が充実したものとなり、皆さんの将来にとって、大きな糧になることを願って、学長の式辞といたします。

平成 24 年 4 月 3 日

姫路獨協大学 学長 本多義昭